

ドイツオペラとしての

Die Zauberflöte

「魔笛」

文 田辺とおる

《あらかわバイロイト》公演監督

オペラ劇場《あらかわバイロイト》の次回公演は、モーツァルト作曲の「魔笛」です。「ワグナーじゃないの？」って思った、あなた、お目が高い。オペラ通ですね。

そう、《あらかわバイロイト》はもちろん、巨匠ワグナーが自作を上演する「だけ」の為に造った祝祭劇場から命名されています。鎮座するのはドイツ中部、フランケン地方の小都市バイロイトの丘の上。世界中のワグナーファンにとって「緑の丘」と言えば、バイロイト祝祭劇場を指すのであります。ちなみにこの一帯は「山羊の陰囊」という際どい名前の丸い瓶で知られるフランケンワインの産地。濃厚なエロス溢れるワグナーオペラとの関係は……ないでしょうけど（笑）。

話、それでした。
僕たちの次回ワグナー公演は九月二十三〜二十五日の「神々の黄昏」です。

でも、御本家バイロイトの国ドイツと、《あらかわバイロイト》の国日本では、オペラ事情が随分違う訳ですね。

ドイツでは全国の都市が劇場を持ち、大半が専属芸術家を抱えてオペラ・オペレッタ・ミュージカル・演劇・バレエ・児童劇等を毎晩のように上演しています。イタリアオペラも数多く公演しますが、もちろん自国作品のドイツオペラは、レパートリーの中心を成しています。

日本のオペラ公演も随分増えましたが、「全国くまなく」とはいきませぬし、新国立

劇場や二期会公演などを除けば、大半がイタリアオペラです。ですから僕たちは、ワグナーを広める意味においても、オペラファンの皆さんが、ドイツオペラそのものに親しんで戴ければと願っているのです。

そこでワグナー上演と並行して「あらかわバイロイト特別公演」魅惑のドイツオペラ」というシリーズを立ち上げました。第一回目は、去る一月の「ヘンゼルとグレーテル」。今回の「魔笛」が二回目です。

一口にドイツオペラといっても、非常に多様な世界です。でも、誰にでもスツと楽しんでもらえるのは、きつとメルヘンでしょう。グリム童話や詩集「子供の不思議な角笛」等で知られる通り、ドイツはメルヘンの宝庫。様々な作品がオペラや歌曲の題材になっており、なかでも「ヘンゼルとグレーテル」は最も代表的なオペラです。そしてメルヘン物オペラの第一世代の名作といえ、その筆頭は「魔笛」をおいて他にありません。

その「魔笛」。日本でも馴染深い作品です。そもそも王子タミーノが、どうやら日本人らしいのです！

ト書きは「日本の狩衣をまとった王子」。伝統的演出では大和時代のようにでたちが多いようですね。ま、「日本から輸入した服？」なんて言ったらメルヘンは台無しですから（笑）、こゝは、日本人と思うことにしましょう。時代は架空。場所はどうかやらエジプト。ザラストロは、古代エジプトの神に仕える祭司です。そしてモノスタトス

を始めとする部下たちは黒人。「神殿のうしろにピラミッドが見える」という指定があったりして、演出によっては、ヴェルディの「アイーダ」を流用したかというような舞台も見かけます。でもなぜ、日本の王子がエジプトで蛇に襲われているところから劇が始まるのか、よく解りません。当時のヨーロッパ人が思い描いた異国情緒、ということなのでしょうね。

日本の公演記録も非常に多い作品です。日本初演も古く大正二（一九一三）年、帝国劇場の部分上演。全曲の演奏会形式公演が昭和十五年、舞台上演は二十八年だそうです。もちろん日本語上演でした。

「そんなに身近ならばなぜ《あらかわバイロイト》がわざわざ上演するの？」と思つた貴方。テレビの池上さんじゃないけど「いい質問ですねえ」（笑）。

訳は、あるのです。
日本での一般的な公演よりも、もっと「ドイツオペラ」っぽくやりたい、からです。しかも日本人歌手だけで。

ドイツオペラの喜劇やオペレッタが日本で普及するのには、大きなハードルがあります。曲間のドイツ語セリフです。

イタリア語オペラの喜劇で曲間がどうなっているかといえば、レチタティーヴォです。叙唱などと訳されます。メロデックな歌ではなく「基本的にはセリフだけ音高が決まっていて伴奏が付く」という代物です。曲間の処理の差は、歌の国イタリア

と芝居の国ドイツの差、かもしれませぬ。

外国人歌手にとつて、歌に近いレチタティーヴォは随分助かります。音楽の無いセリフシーンに比べて扱ひ所があります。

最近はず幕の御蔭で原語上演が増えましたが、オペラの翻訳上演は音楽と歌詞の相性が悪いし、第一これだけ外国から様々な歌劇場が来演し、家庭ではCD鑑賞が普及したのですから当然です。洋画だって、吹替えより「原語と字幕」に人気があります。

でもドイツオペラでは、歌手にとつてセリフのハードルが高いから、翻訳上演や、曲のみドイツ語でセリフが日本語という折衷案が生まれます（登場人物がバイリンガルだなんて、劇として絶対おかしいですね）。

《あらかわバイロイト》は、ここにこだわります。曲もセリフもドイツ語で、ドイツオペラにどっぷり浸って戴きたいと思えます。魔笛の日本人公演では、極めて少数派の試みです。

とはいえ正直に告白しますが、日本人で、しかも俳優ではなく歌手が話すセリフですから、ドイツ人と同じようにはいきませぬ。ここが演出家の腕の見せ所。大胆なカットでテンポよく運ぼうと思えます。もともと魔笛の膨大なセリフはドイツでも半分以上カットされます。全部演じたら五時間超えて、メルヘンの一夜とは言えなくなってしまう。だからセリフと音楽でスピーディに展開する魔笛というのは、本国の上演慣習にも、作品のスピリットにも、反していないと思ふのです。

「ドイツオペラとしての魔笛」。
御期待ください。